

栄養士に関する社会的役割の変化について (第2報) 養成施設生の意識調査

齋藤 貴美子
栄養科

井上 節子
栄養科

The Changing Social Role of the Nutritionist

Kimiko Saito
Department of Nutrition Science

Setsuko Inoue
Department of Nutrition Science

はじめに

社会状況の変化とともに、栄養士を取り巻く状況も大きく変わってきているといわれ、その対応が問われている。

栄養士に関する社会的状況の変化として、次の点があげられる。

- ①社会生活のニーズの多様化による食の問題拡大
- ②少子化、高齢化社会による食の問題拡大
- ③生活習慣病と慢性疾患・合併症の増加
- ④医療の高度化
- ⑤地域保健法に基づく住民サービス
- ⑥介護保健法に基づく介護支援専門員としての業務範囲拡大
- ⑦国際化・情報化社会

栄養士制度が発足して以来、これだけ多くの課題をかかえた時代はかつてなかった。

これに対して、厚生省では、「21世紀の管理栄養士等あり方検討会」を設置し¹⁾、多様化専門化する保健・医療・福祉領域において、栄養の専門職種である管理栄養士等の業務のあり方から、国家試験のあり方、養成のあり方まで含めた検討を行っている。日本栄養士会でも栄養士将来像検討特別委員会を設置し、「21世紀における栄養士活動の課題」を提言した²⁾。全国栄養士養成施設協会では、カリ

キュラム案の検討に入っている³⁾。

著者らは、これに先がけ、栄養士を取り巻く状況把握として、職場での実状調査を行ってきた。その結果等によると^{4)~6)}、栄養士業務は、近年20数種類範囲が広がるとともに質も高くなり、その対応として関連する知識と技術の拡大と高度化が求められている。また一方、制度としては栄養士制度の中に管理栄養士が加わって⁷⁾35年経過したが、業務分担の実施率は27.3%と低く、しかも実施している施設は、病院、行政の法的規制のある部分⁸⁾⁹⁾に限られている現状である。

このような状況を養成中の学生がどのように捉え、栄養士に対してどのような認識と期待度を持っているのか、今回は学生に対する調査を実施した。これに関する文献^{10)~14)}はかなり古いものがあるのみであり、調査の意義があると認識した。社会状況の変化とともに養成される学生の状況も変わってきている。栄養士の社会的役割の変化に伴って養成のあり方の再検討が必要であるが、その教育成果をあげるには、養成を受ける側の実状把握をし対応させていくことも大切と考える。今後現状を踏まえた栄養士教育の方向性と内容を探りたい。

調査方法

1998年度卒業の本学栄養士課程学生149名に対し、1998年1月にアンケート調査を実施した。回収率100.0%であった。栄養士に対する意識を、入学時と卒業時でどう変化したか捉えるため、同一対象に対し両時点の内容を調査した。

調査内容は、入学時と卒業時の意識に分け以下の通りである。

1. 入学時の意識 ①志望理由 ②栄養士に関する知識の入手先 ③実在の栄養士承知の有無 ④栄養士業務に関する知識 ⑤栄養士就職への意志 ⑥就職希望職場の種類 ⑦就業希望期間
 2. 卒業時の意識 ①栄養士への職業観 ②就職動向の結果 ③栄養士就職への意志変化の有無と時期 ④栄養士として就職しない理由
- 結果については、質問項目別にまとめ複数項目間のクロス集計を行った。

結果及び考察

1) 入学時の意識

1. 栄養士養成科への志望理由

栄養士養成科へ入学した理由についての集計結果を表1に示した。回答率の高い順に、次の三つのブロックにまとめることができる。まず、栄養士の資格を取りたい(81.9%)が最も高く、さらにその1/3が上位資格の管

表1 志望の理由

理由	n	%
栄養士の資格をとるため	122	81.9
将来の生活に役立つと思ったから	85	57.0
健康と栄養について興味があったから	76	51.0
調理が好きだから	71	47.7
将来の仕事に役立つと思ったから	50	33.6
食物全般にわたって勉強がしたいから	47	31.5
将来、管理栄養士になりたいから	42	28.2
スポーツと栄養について興味があったから	29	19.5
家族や先生などから、勧められたから	18	12.1
受験科目が受けやすかったから	12	8.1
その他	2	1.3

複数回答、n=149、%=nに対する比

理栄養士を入学時から目指している。近年の資格指向の流れを反映しているものと思われる。次いで、将来の生活に役立つと思ったから(57.0%)が高く、将来の仕事に役立つからを23.4ポイント上回り、高校卒業時点では将来の仕事に対する実感があまり持てず、自分の生活への期待感の方が持ちやすいのではないかと推察する。以下、健康と栄養について興味があった(51.0%)、調理が好きだから(47.7%)、食物全般にわたって勉強したいから(31.5%)、スポーツと栄養について興味があったから(19.5%)と学ぶ内容への関心が50~20%で、その中には社会的な影響と思われる健康指向が含まれている。

2. 栄養士についての知識の入手先

栄養士についての知識の入手先の集計結果を回答率の高い順に表2に示した。本・雑誌から(45.6%)が最も高く、次いで入学案内(31.5%)とマスコミ広報誌からが大多数であり、以下、家族(24.8%)、先生(16.1%)、先輩・友人(12.8%)の回り人からとなっている。

この栄養士知識の入手先と栄養科への入学理由をクロス集計してみると、特徴的な点は管理栄養士になりたいとスポーツ栄養に興味があって入学した場合、栄養士の知識を家族から得た回答率が25~30%で他の理由より高かった。管理栄養士やスポーツ栄養士については、マスコミ情報として、高校生のみでなく一般の人にも印象強く伝わっているものと

表2 栄養士に関する知識の入手先

入手先	n	%
本・雑誌から	68	45.6
入学案内で	47	31.5
家族から	37	24.8
先生から	24	16.1
先輩・友人から	19	12.8
栄養士から	12	8.1
ほとんど知らなかった	12	8.1
その他	9	6.0

複数回答、n=149、%=nに対する比

推察できる。

3. 実在の栄養士承知の有無

栄養士で働いている人を実際に知っていたか、また知っていた場合どこの栄養士かをクロス集計した結果が表3である。知っていたは56.4%で、残り43.6%いわゆる半数弱は、知らないまま自分の進路に栄養士を選んでいく。栄養士で実際に働いている姿も見ずに広報誌でのみ得ている情報は、表面的な浅いものと予想される。

また、知っている場合どこの栄養士かは、学校69.0%、病院53.6%、福祉20.2%、保健所11.9%である。栄養士の職域別就業割合を日本栄養士会会員数内訳¹⁵⁾でみると、病院40.3%地域活動17.3%、福祉16.7%、学校10.4%、行政6.1%、集団健康管理5.4%、研究教育3.7

%である。

また、平成9年度管理栄養士・栄養士養成課程卒業生の職域別就職先を全国栄養士養成施設協会の就業実態調査¹⁶⁾でみると、事業所34.0%、病院28.2%、福祉21.0%、その他8.7%、学校2.9%、官公署2.5%、教育養成2.4%、矯正0.3%である。今回の結果は、学校と病院が多数を占め、社会における栄養士の就業状況と相関していない。本人または近親者の体験を通してだと推察され、比較的狭い範囲でしか知識を得ていないと思われる。栄養士は高校生までが接するような場に存在せず、身近な対象となっていないことが確認できた。入学後に、自分に合わないといういわば失望感を持つ学生がでてくる原因が、ここにあるのではないかと推察される。適材適所の論理

表3 実在の栄養士承知の有無

	全体	学校	病院	福祉施設	保健所	事業所	市町村	養成施設	その他
知っていた	84 (56.4)	58 (69.0)	45 (53.6)	17 (20.2)	10 (11.9)	7 (8.3)	4 (4.8)	1 (1.2)	4 (4.8)
知らなかった	65 (43.6)	-	-	-	-	-	-	-	-

全体の()=学生総数149に対する比 施設の種別()=知っていた総数84に対する比

表4 知っていた栄養士と予想業務内容の認知度

	全体	病院等で献立、食事作りをしている	学校や会社で食事を作っている	病院等で患者向けに栄養指導をしている	スポーツ選手の手配管理をしている	食品、食料に関する仕事をしている	栄養の教育、改善を行っている	保健所、市町村、保健センター等で健康管理、栄養相談を行っている	テレビ等、マスコミで栄養の話をしている	在宅の高齢者、病人に食事を提供している	国民の健康づくり指導を行っている
どこの栄養士を知っていたか	149 (100.0)	99 (67.8)	92 (63.0)	83 (56.8)	80 (54.8)	64 (43.8)	42 (28.8)	42 (28.8)	32 (21.9)	17 (11.6)	10 (6.8)
学校	58 (100.0)	37 (67.3)	41 (74.5)	27 (49.1)	31 (56.4)	22 (40.0)	16 (29.1)	14 (25.5)	10 (18.2)	3 (5.5)	2 (3.6)
病院	45 (100.0)	33 (76.7)	28 (65.1)	32 (74.4)	27 (62.8)	16 (37.2)	13 (30.2)	14 (32.6)	9 (20.9)	5 (11.6)	3 (7.0)
事業所	7 (100.0)	3 (42.9)	5 (71.4)	5 (71.4)	4 (57.1)	2 (28.6)	3 (42.9)	3 (42.9)	2 (28.6)	-	1 (14.3)
福祉施設	17 (100.0)	14 (93.3)	11 (73.3)	11 (73.3)	9 (60.0)	3 (20.0)	5 (33.3)	5 (33.3)	3 (20.0)	-	-
保健所	10 (100.0)	9 (90.0)	9 (90.0)	7 (70.0)	7 (70.0)	2 (20.0)	2 (20.0)	5 (50.0)	2 (20.0)	-	-
市町村	4 (100.0)	4 (100.0)	3 (75.0)	3 (75.0)	3 (75.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	3 (75.0)	-	-	-
養成施設	1 (100.0)	-	1 (100.0)	-	1 (100.0)	-	-	-	-	-	-
その他	4 (100.0)	3 (75.0)	4 (100.0)	3 (75.0)	3 (75.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	2 (50.0)	1 (25.0)	1 (25.0)	1 (25.0)

からすると、自分が選ぶ職業に対して、予想が大きく外れることは望ましくない。養成側としても、適格者を得る上での問題点として対応を考える必要があると思う。さらに資質向上の上では多くの志望者がでてくることが必要要件であるが、栄養士は絶対数の少なさや職場での位置づけで一般の人に接する機会が少ないため、広報でどう対応するか検討の必要があると思われる。

4. 予想していた業務内容

栄養士はどのような仕事をしていると思ったかの問いに対する集計結果と、どこの栄養士を知っていたかをクロス集計したものを表4に示した。予想した業務内容を全体でみると、病院等で献立・食事作り(67.8%)、学校や会社で食事作り(63.0%)と集団給食施設での給食管理が約70%で回答率が最も高く、次いで病院での栄養指導(56.8%)が約60%であった。栄養士の業務として、栄養指導や調理指導は法的⁷⁾⁸⁾にも定義づけられている。栄養士の主な業務を2/3の学生が予測でき

ていたことは、この点での情報がある程度正しく伝わっていると見ることができる。しかし、スポーツ選手の食事管理が55%の回答率であったのは予想外の結果である。スポーツ栄養管理に携わっている栄養士は実数としては過少にすぎず、接する機会はほとんどないと思われる。最近Jリーグやプロ野球球団の栄養士がテレビ等に登場することがあり、マスコミによる広報力の大きさではないかと推察する。なお、食品・食物に関する仕事に対しても、約45%と半数近い学生が知っていた。

入学前に知っていた栄養士との関係のみみると、学校の栄養士を知っていたグループは、栄養士の仕事の予測を学校等で食事を作っている(74.5%)、また病院の栄養士を知っていたグループは、病院等で献立・食事作り(76.7%)、栄養指導している(74.4%)の回答率が高い。入学前に知っていた栄養士を通して、栄養士の仕事をつかんでいることがわかった。栄養士の情報を実際に出会うことによる狭い範囲でつかんでいる現状では、一部

表5 入学時の栄養士での就職希望と卒業時の就職動向

	全 体	栄養士として 勤めたいと思 った	栄養士として 勤めるかは、 わからなかった	栄養士として 勤めたいと思 わなかった	就職しないと 考えていた	不 明
全 体	149 (100.0)	92 (61.7)	42 (28.2)	11 (7.4)	3 (2.0)	2 (1.3)
栄養士として内定をもらった	11 (100.0)	10 (90.9)	—	—	—	1 (9.1)
栄養士としての仕事を 探している	33 (100.0)	29 (87.9)	3 (9.1)	1 (3.0)	—	—
栄養科の知識を生かせる 職場に内定をもらった	18 (100.0)	13 (72.2)	4 (22.2)	—	—	1 (5.6)
栄養科の知識を生かせる 職場を探している	15 (100.0)	9 (60.0)	6 (40.0)	—	—	—
他の職種に内定をもらった	31 (100.0)	13 (41.9)	14 (45.2)	4 (12.9)	—	—
他の職種で探している	29 (100.0)	15 (51.7)	10 (34.5)	2 (6.9)	2 (6.9)	—
進学を考えている	11 (100.0)	5 (45.5)	4 (36.4)	2 (16.7)	1 (9.1)	—
就職、進学をしない	6 (100.0)	2 (33.3)	2 (33.3)	2 (33.3)	—	—
その他	3 (100.0)	3 (100.0)	—	—	—	—

分を通しての片寄った見方であることが十分予想できる。入学後の学生に、栄養士はこんなことまでやるのかという感想がでてくる原因がここにあると推察できる。

5. 栄養士として就職の意志

入学時に、卒業後の栄養士への就職をどう考えたかの集計結果と就職動向の結果をクロス集計し、表5に示した。入学時の就職希望は、栄養士で勤めたいが61.7%と2/3の学生が期待している。わからないと答えたいいわゆる考慮中が28.2%で、これを合わせると大部分の学生が大なり小なり栄養士での就職に対して望みを持っていたことになる。

この結果を就職動向の結果とクロスさせてみると、入学時に栄養士として勤めたいと思っていたグループから、栄養士の全内定者がでていて、現在も栄養士の仕事を探している人も高率である。入学時の意志がそのまま卒業時の就職につながっていることが分かった。栄養士で就職するための活動は、他の一般職などと比べると求人数も少なく、さらに最近

の経済状況が加わりかなり困難性が伴う。その状況の中で栄養士の就職者を増加させるには、強い意志で就職活動に努力する者を増やす必要がある。それには、入学時に栄養士への意志をしっかりと持った学生を得ることが重要だと思われる。

さらに希望の勤務先は、病院が約35%、学校30%、事業所20%、福祉施設15%であった。知っていた栄養士は学校が最も多く、次いで病院であったが、順位が入れ替わっているもののこの二つが上位にある結果は同じであり、自分の知っている栄養士の影響があるものと思われる。また、希望先として病院が最も高いのは、病院における栄養士の必要性や地位の向上の影響と思われる。若い人達の社会的状況に対する見方は敏感であると思われる。

6. 就業希望期間

栄養士として勤めた場合の就業希望期間の結果と就職動向の結果をクロス集計し、表6に示した。栄養士として一度は勤めてみたいが約35%で最も多く、できるだけ長くが30%、

表6 入学時の就業希望期間と卒業時の就学動向

		一生の仕事としたい	できるだけ長く勤めたい	どのくらい分からないが結婚するまで勤めたい	どのくらい分からないが一度は勤めてみたい
全体	134 (100.0)	30 (22.4)	39 (29.1)	19 (14.2)	46 (34.3)
栄養士として内定をもらった	11 (100.0)	2 (18.2)	8 (72.7)	—	—
栄養士としての仕事を探している	33 (100.0)	12 (36.4)	8 (24.2)	4 (12.1)	8 (24.2)
栄養科の知識を生かせる職場に内定をもらった	18 (100.0)	3 (16.7)	5 (27.8)	2 (11.1)	7 (38.9)
栄養科の知識を生かせる職場を探している	15 (100.0)	2 (13.3)	6 (40.0)	3 (20.0)	4 (26.7)
他の職種に内定をもらった	31 (100.0)	5 (16.1)	6 (19.4)	3 (9.7)	13 (41.9)
他の職種で探している	29 (100.0)	4 (13.8)	5 (17.2)	4 (13.8)	12 (41.4)
進学を考えている	11 (100.0)	2 (18.2)	2 (18.2)	2 (18.2)	3 (27.3)
就職、進学をしない	6 (100.0)	—	1 (16.7)	2 (33.3)	1 (16.7)
その他	3 (100.0)	2 (66.7)	1 (33.3)	—	—

一生の仕事としたい20%、結婚するまで15%であった。

栄養士の資格取得を目的として入学した学生は80%いるが、同時期からライフワークとしてまたは可能な限り将来の自分の職に結びつけようと考えていた対象は約50%であった。これを就職動向の結果と結びつけてみると、可能な限りおよび一生栄養士で勤めたいと考えたグループから栄養士としての内定者がでている。一方、どのくらいかわからないが一度は、および結婚するまではと期間をある程度限定していたグループには、栄養士としての内定者が出ていない。さらに、一度は栄養士として勤めてみたい程度に考えていたグループは、他の職種に内定または現在も探している人が各約40%と多い。この結果で、入学時に期間まで含めて栄養士への就職を考えていた、いわゆる積極的な意志を示していた人ほ

ど、卒業時に栄養士として内定をもらったか現在も探している行動につながっていることが確認できた。

2) 卒業時の意識

1. 栄養士に対する職業観

この項目以後からは、栄養士課程で2年間学んだ後に得た回答である。先記のように、入学時には栄養士に対する知識を十分持たずこの課程を選んだ者が半数弱いた。その後知識を得て就職先を選ぶ現実の段階になった際、

表7 栄養士に対する卒業時の職業感

職業感	n	%
今後は、今以上に必要とされる職業だと思う	41	29.3
社会的にぜひ必要な職業だと思う	37	26.4
非常に苦勞の多い職業だと思う	28	20.0
大変生きがいを感じる職業だと思う	12	8.6
社会的に十分認められていない職業だと思う	12	8.6
華やかさのない職業だと思う	9	6.4
あまり将来性がない職業だと思う	1	0.7
その他	0	0.0

n=140、%=nに対する比

表8 志望理由と就職動向の結果

	全体	栄養士として内定をもらった	栄養士としての仕事を探している	栄養科の知識を生かせる職場に内定をもらった	栄養科の知識を生かせる職場を探している	他の職種に内定をもらった	他の職種を探している	進学を考えている	就職、進学をしない	その他
全体	149 (100.0)	11 (7.4)	33 (22.1)	18 (12.1)	15 (10.1)	31 (20.8)	29 (19.5)	11 (7.4)	6 (4.0)	3 (2.0)
栄養士の資格を取るため	122 (100.0)	9 (7.4)	29 (23.8)	15 (12.3)	14 (11.5)	27 (22.1)	21 (17.2)	8 (6.6)	3 (2.5)	3 (2.5)
将来の生活に役立つと思ったから	85 (100.0)	5 (5.9)	21 (24.7)	6 (7.1)	10 (11.8)	19 (22.4)	19 (22.4)	8 (9.4)	4 (4.7)	-
健康と栄養について興味があったから	76 (100.0)	7 (9.2)	13 (17.1)	14 (18.4)	9 (11.8)	15 (19.7)	9 (11.8)	8 (10.5)	5 (6.6)	-
調理が好きだから	71 (100.0)	7 (9.9)	14 (19.7)	9 (12.7)	11 (15.5)	12 (16.9)	11 (15.5)	6 (8.5)	5 (7.0)	1 (1.4)
将来の仕事に役立つと思ったから	50 (100.0)	8 (16.0)	19 (38.0)	8 (16.0)	5 (10.0)	3 (6.0)	6 (12.0)	5 (10.0)	1 (2.0)	-
食物全般にわたって勉強がしたいから	47 (100.0)	3 (6.4)	10 (21.3)	7 (14.9)	7 (14.9)	6 (12.8)	8 (17.0)	5 (10.6)	4 (8.5)	-
将来、管理栄養士になりたいから	42 (100.0)	9 (21.4)	8 (19.0)	6 (14.3)	3 (7.1)	8 (19.0)	5 (11.9)	2 (4.8)	2 (4.8)	2 (4.8)
スポーツと栄養について興味があったから	29 (100.0)	1 (3.4)	8 (27.6)	4 (13.8)	3 (10.3)	8 (27.6)	4 (13.8)	3 (10.3)	-	-
家族や先生などから勧められたから	18 (100.0)	-	4 (22.2)	-	1 (5.6)	4 (22.2)	7 (38.9)	1 (5.6)	2 (11.1)	-
受験科目が受けやすかったから	12 (100.0)	-	4 (33.3)	-	1 (8.3)	3 (25.0)	4 (33.3)	-	-	-
その他	2 (100.0)	-	-	1 (50.0)	-	1 (50.0)	-	-	-	-

栄養士をどういう職業として捉えたかを表7に示した。社会的にぜひ必要な職業だと思うのが26.4%、大変生きがいを感じる職業だと思うのが8.6%、現実に存在価値が認められていると自信が持てる回答は合わせて35.0%である。

また、今後は必要とされる職業だと思うのが29.3%と最も回答率が高く、非常に苦勞の多い職業だと思う20.0%、社会的に十分認められていないが8.6%、華やかさが無い6.4%、将来性がない0.7%であった。この部分を、今回の調査結果の中で大きな課題として取り上げる必要があると考える。現在よりも将来に期待感を持つが約30%いるということである。入学時に約80%の学生が栄養士の資格取得を目的としているのは、栄養士という職業に対してある程度の期待感を持っていたものと思われる。しかし、2年間経た時点でもなお期待感を持てるのは約35%と格差の大きいことが確認できた。

2. 就職動向の結果

就職活動した結果と入学時の志望理由とのクロス集計結果を表8に示した。全体で見ると、栄養士としてが内定(7.4%)と活動中(22.1%)合わせて29.5%、在学中に得た知識を生かせる他の職種が内定(12.1%)と活動中(10.1%)を合わせて22.2%、他の職種が内定(20.8%)と活動中(19.5%)合わせて40.3%、進学7.4%、その他6.0%であった。内定者が少ない結果となっているのは、経済事情の厳しさから求人数が少ないのと、この調査の時期が最適ではなかったとみることができ。学生の協力を得やすい事情を考慮して1月に実施したが、予想以上に例年と事情が異なっていることが判明した。しかし、栄養士関連の就職決定率は、活動中も含めると例年の割合と同程度になるので、そこまで含んだものを学生の意志としてみておくことにする。栄養士および得た知識を生かせる職種を合

わせると51.7%となる。また、栄養士そのものは活動中も含めて約30%であり、これらの数字をどうみるかである。目的養成なので栄養士での就職者が多くなることが望ましいが、全国の栄養士養成施設校卒業生の栄養士業務就職率は管理栄養士課程を含めた平均で36.6%、そのうち本学と同じ2年制短期大学は29.8%である¹⁰⁾。今回の結果は全国平均の数値とほぼ同率といえるが、より適格者の入学を得る上では、もっと増加させるよう努力する必要があると思われる。

入学時の志望理由との関係でみると、栄養士への内定率は、入学時に将来管理栄養士になりたいと思ったグループが21.4%と最も高く、次いで将来の仕事に役立つと思ったグループが16.0%であった。現在活動中を合わせると将来の仕事に役立つと思ったグループが54.0%、管理栄養士になりたいグループが40.4%という結果であった。これによると、入学時から就職に役立つという目的意識を持ち、さらに上位資格まで取得しようという積極組が結果に結びついていることがわかった。この二つの回答は、入学の理由の中では回答率30%とあまり高率ではないが、就職にまで結びつけるのはこのグループからであると確認できた。就職活動開始時に、栄養士の資格を生かした職種を選ぶかかなり苦慮すると予想していたが、実際には入学時の考えが基になって決定まで結びついていることが判明した。栄養士での就職者を多く出すことで養成校と

表9 栄養士就職への動向変化の分類

動向変化の分類	n	%
入学したとき栄養士として就職したかつし、現在もしたい	52	36.1
入学したとき栄養士として就職したかつが、現在はしたくない	74	51.4
入学したとき栄養士として就職したくなかつが、現在はしたい	5	3.5
入学したとき栄養士として就職したくなかつし、現在もしたくない	13	9.0

n=144、%=nに対する比

しての社会的評価が高まると思われる、今後入学時から職業意識をしっかりと持った学生をどう得るか考慮する必要があると考える。

3. 栄養士就職への動向変化の有無

栄養士として就職するか入学時と卒業時の意志変化の有無について表9に示した。入学時の栄養士での就職希望を卒業時まで持ち続けているのは36.1%と1/3である。逆に、入学時には希望していなかったが卒業時になって栄養士として就職したいと変化したのは3.5%である。一方、入学時は希望していたが卒業時になって希望しなくなった、いわゆる否定的考えに変わった者が51.4%と約半数にいたっている。入学時には栄養士の資格取得を目的とした者が約80%、栄養士での就職希望が未定を含めて60~90%いながら、卒業時における格差がかなり大きい。その原因がどこにあるのか他の回答と合わせて分析してみる必要がある。

4. 栄養士就職への動向変化の時期

栄養士での就職の意志が変化した時期を調べた結果が表10である。最も高率なのが2年前期で50.6%に達し、次いで1年後期が36.4%である。合わせて87.0%が1年後期から2年前期にかけて意志が変わっている。

入学時に実際の栄養士を知らなかった者が44.0%で、約半数が栄養士をよく知らずに志望したと予測できる。そして、入学後栄養士に対する知識が入りはじめ、1年後半には専門科目が多くなることによってその知識が多くなり、さらに2年前半に学外実習を経験することで情報入手がピークに達する流れと、就職への意志変化の時期が一致している。こ

表10 栄養士就職への動向変化の時期

時期	n	%
1年前期	4	5.2
1年後期	28	36.4
2年前期	39	50.6
2年後期	6	7.8

n=77、%=nに対する比

の間、成績がでて自分の適不敵を考えるようになる、就職情報が入る、就職活動に入るに際して現実のものとして考えるようになったことなどが加わっていると思われる。

今回の結果は、栄養士に対する知識が入学時には少なく予想の部分が多かったが、入学後に現実がわかり、この格差が大であると受け取れる。これに対する見方は種々あると思われる。一般職などと違い、在学中に職場の経験をして未熟な時期に現実が見えすぎてしまい、自信がないまま職を選択せざるを得ない結果、挑戦から逃避につながってしまうという見方もある。学生にとって、理想と現実の格差を大きく感じ、約50%の者が就職への意志を変えているのは大きな課題であり、適格者を得る上でも検討すべきことと考える。

5. 栄養士で就職しない理由

栄養士として就職しない者の理由を表11に示した。自信がないが40.5%と最も多い。この点を含め学生側の理由と思われるものとして、新しくやりたい事ができたからが22.8%、仕事内容が自分の予想と違っていたが21.5%、責任が重く・また体力的に自分に向かないと判断したが合わせて19.0%であった。これに対して、学生自身以外の理由は、就職先がないが25.3%である。養成側としても責任を持って対応すべき点である。また見方によっては自信がない、予想と違っていたも、養成のあり方や情報の流れ方など必ずしも学生自身の理由とばかりいえない面がある。

自信がない点についてはいくつかの理由が

表11 栄養士で就職したくない理由

理由	n	%
勉強不足で自信がない	32	40.5
就職先がない	20	25.3
新しくやりたい事が出てきたから	18	22.8
仕事内容が自分の考えていたのと違っていたから	17	21.5
責任ある仕事であり、自分はむかえないと思ったから	13	16.5
体力に自信がないので	2	2.5
その他	8	10.1

n=110、%=nに対する比

あると思われる。一般的に、専門職は在学中の知識だけでは十分ではなく、むしろ職場へ入ってからの経験を通して知識や技術が確立し、自信が持てるようになるという特徴がある。また、栄養士が社会的に求められているものが最近より高度化、専門化し、養成期間が2年で不足ではないかという点が検討されているのも現実である。しかし、2年の養成が認められている以上、その養成期間内で少しでも誇りを持ち自信を得て卒業し、次のステップへ進めるようにすべきである。

栄養士制度においては、栄養士の上に管理栄養士を追加し、業務分担も明確にせずに社会の流れと共に業務内容を拡大してきた。カリキュラムも限られた単位数の中に科目追加の一途をたどってきた。学生の立場で考えると、焦点が薄れ消化不良の感があり、自信が持てない結果に結び付いていることも一理ある。今後は2年間で何をどこまで学ぶか、基礎力をしっかり身につけることを目的とし、次のステップとして管理栄養士としての科目を加えるかたちで編成し直す必要があるのではないだろうか。

要約

栄養士の社会的役割の変化に伴って、養成のあり方が問われている。その際、養成を受ける側の実情把握をして対応する必要があると考え、養成施設生に対して調査を実施した。結果は、次のとおりである。

- 1) 志望の理由は、栄養士及び管理栄養士への資格取得が最も多く(～82%)、次いで将来の生活・仕事に役立つ(～57%)、さらに学ぶ内容への興味(～51%)であった。
- 2) 栄養士に関する情報の入手先は、本・雑誌、入学案内のマスコミ広報誌が45～30%と大多数で、回りの人からが13～25%程度である。

- 3) 実在の栄養士を知っていたのは56%で、半数弱は知らないまま栄養士養成科を選択している。知っている場合も、学校、病院の狭い範囲でしかない。
- 4) 予想していた栄養士の業務内容は、献立・食事作り、栄養指導の狭い範囲にとどまっている。
- 5) 栄養士としての就職希望は、入学時では約60%であるが、卒業時には約30%になる。
- 6) 卒業時における栄養士への職業感は、存在価値に自信が持てる肯定感を持つものが35%、苦勞が多いなど否定感を持つものが36%いる。
- 7) 就職動向の結果は、現在進行中も含めて栄養士が30%、在学中に得た知識を生かした職種が22%、合わせて栄養士関連職種52%であった。栄養士での内定者は、入学時の志望理由が管理栄養士になりたい・職に生かせるからであった者、就業希望期間がライフワークとして考えた者の中から出ていて、入学時の意識の積極性が結果につながっている。
- 8) 栄養士で就職しない理由は、自信がないが41%で最も多い。その他学生側の原因が多いが、学生以外の原因として就職先がないが25%であった。

本研究は、1998年度文教大学女子短期大学部共同研究費の助成を受けて実施したものである。

<文献>

- 1) 藤沢良知：管理栄養士制度の発展に向けて、栄養日本 41 197 (1998)
- 2) 栄養士将来像検討特別委員会：21世紀における栄養士活動の課題、栄養日本 40 466～471 (1997) 日本栄養士会
- 3) 総会資料—事業報告、全栄協月報 464 36 (1999) 全国栄養士養成施設協会

- 4) 斎藤貴美子、井上節子：栄養士に関する社会的役割の変化について（第1報）職場での実状調査、第45回日本栄養改善学会講演集 173 (1998)
- 5) 斎藤貴美子、井上節子：栄養士に関する社会的役割の変化について（第1報）職場での実状調査、本誌 42 91~103 (1998)
- 6) 日本栄養士会：管理栄養士に関する調査、栄養日本 41 200~5 (1998)
- 7) 厚生省保健医療局監修：栄養関係法規類集、栄養士法 452 (1962) 新日本法規出版
- 8) 厚生省保健医療局監修：栄養関係法規類集、栄養改善法 33 (1985) 新日本法規出版
- 9) 厚生省保健医療局監修：栄養関係法規類集、健康保険法 1028-18-1 (1997) 新日本法規出版
- 10) 羽田・太田・広川・原・岡崎・鈴木：栄養士養成施設校の新入学生の栄養士に関する意識調査について（その1）、第23回日本栄養改善学会講演集 232~3 (1976)
- 11) 太田・羽田・原・岡崎・広川・鈴木：栄養士養成施設の卒業時における学生の就職状況と栄養士に関する考え方について、第24回日本栄養改善学会講演集 234~5 (1977)
- 12) 太田・羽田・岡崎・広川・鈴木：栄養士養成施設生の卒業時における就業動向と職業に対する意識について、第25回日本栄養改善学会講演集 232~3 (1978)
- 13) 羽田・南・広川・岡崎・鈴木・太田・原：栄養士養成施設生の卒業時における就業動向と職業に対する意識について、第29回日本栄養改善学会講演集 265~7 (1980)
- 14) 吉野・鈴木・足立：管理栄養士養成施設における卒業前後の栄養士活動の現状とその意識 242~3 (1985)
- 15) 平成10年度会員数（職域協議会別）、栄養日本 42 348 (1999) 日本栄養士会
- 16) 平成9年度管理栄養士・栄養士課程卒業生の就職実態調査の結果、全栄協月報 456 16~28 (1998) 全国栄養士養成施設協会